

題目：がん看護におけるケアリング行為を基盤とするケアリングの構造

保健医療学専攻・看護学分野・看護援助学領域

学籍番号：12S3032 氏名：重久 加代子

研究指導教員：岡崎 美智子 教授 副研究指導教員：鈴木 英子 教授

キーワード：ケアリング がん看護 概念分析 がんサバイバー がん看護専門看護師

1. 研究の背景と目的

ケアリングは熟練した看護師の実践する質の高い看護のなかに見出されており、看護の核であるといわれる。また、がん看護に携わる者の責務として、質の高いケアを提供するためにケアリング能力を高めることが提唱されている。しかし、ケアリングは抽象度の高い概念であり、統一した見解を得られていない。そのため、ケアリングの実践やケアリング能力を高める教育について具体的に示したものはほとんどみられない。

そこで、本研究では、がん看護の質向上に重要なケアリングを実践するための指標となる、がん看護におけるケアリング行為を基盤とするケアリングの構造を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

- 1) 研究デザインと研究の枠組み：ミックス法を用いた記述的・探索的研究であり、5つの研究よりなる。
- 2) 倫理的配慮：本学倫理審査委員会の承認(01-064.11-122.13-Ic173)を得た。

3. 研究 1. 2. 3. 4. 5 の実際

- 1) 研究 1：がん患者のケアを担う看護師のケアリング行動質問紙の作成
 - (1) 目的：がん看護に重要なケアリング行動の実践を定量的に測定する質問紙を作成する。
 - (2) 方法：①対象者：5施設でがん看護に携わる看護師 646 名であった。②調査方法：自記式質問紙による調査で、3週間留め置き後回収した。③調査内容：個人属性とケアリング行動 50 項目(8名の看護師への半構造化面接、2名のがん看護専門看護師の助言より 50 項目を抽出)であった。④調査期間：2005 年 8 月～11 月であった。⑤分析方法：記述統計、因子分析、クロンバック α 係数で分析した。
 - (3) 結果：分析対象者(有効回答率)は看護師 428 名(66.25%)であった。因子分析の結果、7 構成因子 41 の質問項目からなる、信頼性、妥当性がほぼ確保された(クロンバック α 係数 0.930～0.717, 固有値 5.265～1.914, 累積寄与率 52.109%) 質問紙を作成した¹⁾。
- 2) 研究 2：ケアリング行動 41 に対するがんサバイバーと看護師の認識の量的分析
 - (1) 目的：ケアリング行動 41 に対するがんサバイバーと看護師の認識を明らかにする。
 - (2) 方法：①対象者：Aがんセンターの看護師 209 名と同施設に入院中・来院したがんサバイバー 77 名であった。②調査方法：自記式質問紙による調査で、看護師は 3 週間留め置き後回収した。がんサバイバーは研究者が調査の説明と調査票の配布を行い、郵送または 3 週間留め置き後回収した。③調査内容：個人属性とケアリング行動 41 であり、「重要である～重要でない」の 4 件法で、数値化(4～1 点)して評価した。④調査期間：2012 年 3 月であった。⑤分析方法：記述統計(代表値、相関比 η) で分析した。
 - (3) 結果：分析対象者(有効回答率)はがんサバイバー 61 名(79.22%)、看護師 194 名(92.82%)、がんサバイバーの平均得点は 3.38 ± 0.25 、看護師は 3.66 ± 0.14 、認識に差が認められたのは、「常に患者を尊重して関わる ($\eta = 0.535$)」など 7 項目と「意思の疎通 ($\eta = 0.396$)」の 1 因子であった。
- 3) 研究 3：がんサバイバーの闘病体験の語りにおけるケアリングの質的分析
 - (1) 目的：がんサバイバーの闘病体験の語りよりがん看護におけるケアリング行為を明らかにする。
 - (2) 方法：①対象者：患者会で活動するがんサバイバー 5 名であった。②調査方法：半構造化面接をイン

タビューガイドに基づき行い、「がん看護を受けた経験」等とケアリングについて自由に発言してもらった。面接はプライバシーの保てる場所で行い、許可を得てICレコーダーに録音した。③調査期間：2014年3月～5月であった。④分析方法：データは逐語録にし、がん看護におけるケアリング行為を抽出して、研究1と比較検討した。抽出し分析する過程では、博士課程のゼミで質的研究経験者および指導教員とディスカッションし適時指導教員のスーパーバイズを受けた。

(3)結果：面接時間は平均89分であった。がんサバイバーの語りからはケアリング行為111が抽出され、これらはすべて研究1の7構成因子に分類された。

4) 研究4：がん看護専門看護師のがん看護の実践におけるケアリングの質的分析

(1)目的：がん看護専門看護師の実践の語りよりがん看護におけるケアリング行為を明らかにする。

(2)方法：①対象者：認定更新を受けているがん看護専門看護師3名であった。②調査方法：半構造化面接をインタビューガイドに基づき行い、「がん看護で大切にしていること」等とケアリングについて自由に発言してもらった。面接はプライバシーの保てる場所で行い、許可を得てICレコーダーに録音した。③調査期間：2014年5月～6月であった。④分析方法：データは逐語録にし、がん看護におけるケアリング行為を抽出して、研究5と比較検討した。抽出し分析する過程では、指導教員とディスカッションし適時指導教員のスーパーバイズを受けた。

(3)結果：面接時間は平均69分であった。がん看護専門看護師の語りからはケアリング行為163が抽出され、これらはすべて研究5の概念分析より導かれた7属性に分類された。

5) 研究5：Rogersの概念分析を用いたケアリングの概念分析

(1)目的：看護学におけるケアリングの概念を明らかにする。

(2)方法：分析対象の文献は、著書と論文の47件であった。文献は内容を熟読し、ケアリング概念の属性、先行要件、帰結他を抽出した。

(3)結果：属性は25の内容から8カテゴリー、先行要件は11の内容から4カテゴリー、帰結は27の内容から6カテゴリーに分類された。代用語と関連する概念については抽出されなかった。

4. 研究1.2.3.4.5の結果の統合

量的研究1.2と質的研究3の結果を統合し妥当性が確認された7構成因子と、研究4.5の結果を統合し妥当性が確認された8属性より、本研究における新たなケアリングの定義である「対象者の人格を尊重し、人間的な親しみを感じられる援助関係に基づく看護実践」を導いた。次に、本定義に基づき研究1.2.3.4の結果を分析・統合して得た92ケアリング行為を質的に分析した。その結果、がん看護におけるケアリングの構造は、42ケアリング行為を基盤とする8構成要素からなり、「双方向のコミュニケーション」と「人間的な親しみを感じられるかかわり」を基盤に「対象者の尊厳を遵守し対象者と看護師の境界がなくなるような関係」、「対象者と家族が安心して療養できる環境の調整」、「対象者や家族の状態を予測した支援」、「主体的に療養するために必要な情報の提供」、「ケアリングの価値を認めるチーム医療体制」、「対象者の人格を尊重しがん看護の知識と技術を駆使したケアの実践」が隙間なく密接し一体化していることが明らかになった。

5. 考察

本研究より導かれたケアリングの定義は、看護の核であるケアリングを踏まえた、がん看護におけるケアリングを反映しており、がん看護のケアリング実践の核として評価の指標になると考える。また、看護師およびがんサバイバーからケアリング行為を抽出して得られた42ケアリング行為は、がん看護において基盤となるケアリングの実践を具現化するための指標になると考える。これらより、8構成要素が独立したかたちを示しながら、ケアリング全体として一体化している構造を踏まえたケアリング教育への指標が得られた。

6. 結語

がん看護におけるケアリングの構造は、ケアリングの定義を核とし、42ケアリング行為を基盤とする8構成要素が隙間なく密接し一体化していることが明らかになり、ケアリング実践と教育の指標となる。

7. 引用文献

1) 重久加代子, 渡辺孝子, 兵頭明和. がん患者のケアを担う看護師のケアリング行動を測定する質問紙の開発. がん看護 2007;12(6):648-655